

第 69 回 大阪府青少年読書感想文コンクール・府 4

中学校の部 特選

心の色

守口市立梶中 3 年 橋本詩音さん

私は何色だろう。昔の私と今の私の心の色は、同じだろうか。「変わりたい。」と思ったあの時から、変わる事が出来ているのだろうか。

「スクラッチ」は、コロナ禍を生きる中学生の物語。バレー部部長で大雑把な性格の鈴音、冷静沈着な美術部部長の千暁。正反対な二人が、周囲との関わりを経て、迷いながらも未来へ進んでいく物語だ。

私は鈴音とその親友の文菜の関わりに私と私の親友の関わりを重ねた。鈴音の気持ちが暗くなったり、悩んだりしている時に、文菜は必ず鈴音に寄り添っていた。文菜は鈴音を独りにしない。私の親友も、そうだ。私はよく悩む。悩む度に心に不安が募り、心細くなる。そんな時親友は、いつも私の隣にいてくれる。私は、親友の優しさに、どれ程支えて貰（もら）っているだろう。私が私を支えてくれる親友を大切に思う様に鈴音も文菜のことを、きっと大切に思っている。だからこそ、高校では一緒にいられないと知った時の鈴音の気持ちを考えると、胸を締め付けられる様な気持ちになった。自分の心に優しい色をくれて、ずっと自分を支えてくれた人との別れ。私だったら、寂しさに心を埋め尽くされて、何も出来ないとと思う。しかし鈴音は涙を堪え、文菜の背中を押し、文菜に貰った優しい色を返す事が出来ていた。私は鈴音の強さと優しさに憧れると同時に、私自身も鈴音の様にありたいと思った。

次に私は、千暁に心を動かされた。千暁は市郡展の審査で二年連続特選をとっていた。そして今年の審査でも特選をとろうという気持ちで絵を描いていた。受賞するために「正解」から外れない絵を。しかし、鈴音が誤ってその絵を汚してしまった。その汚れをきっかけに、千暁は絵を描き直した。今度は、自分の気持ちのままに。「正解」からは外れたかもしれないが、千暁にとっては、最高の作品になったと思う。そして私は、千暁にとっての絵は、私にとっての作文と同じだと思った。私は、作文を書くことが好きだ。昔は自分の気持ちのままに書いていたのに、いつからか千暁の様に受賞するために「正解」から外れない文章ばかり書く様になっていた。そしてこの文章も、最初は「正解」を目指して書くつもりだった。しかし、やめた。自分の気持ちのままに絵を描く千暁の、いきいきとして鮮やかな心の色を感じて、私も千暁の様に偽らない気持ちを書きたいと思ったからだ。「正解」からは外れているかもしれないが、これが今の私だ。私は、心の呪縛から解放され、晴れやかな気持ちになった。

私は、千暁と千暁の母の関わりにも心を動かされた。千暁の母は台風に対するトラウマを持っている。千暁は母を励ますために明るい色彩で、「正解」から外れない絵を描いていた。しかし、今回千暁が描いたのは、黒い画面に鈴音の泣き顔。私はこの絵が千暁の心を、千暁自身も知らなかった傷も含めて写し出しているのではないかと思った。暗い色の心は傷だらけで泣いている。でも虹色の光が差している。きっと千暁は、この絵を描くことで傷も含めた自分自身の心と向き合う事が出来たのだと思う。そしてその絵は、母の心も動かし、母をトラウマと向き合わせた。トラウマに向き合うためには勇気が必要だ。私もトラウマを持っていた。向き合う勇気が出ず、長い間トラウマに囚（とら）われていた。しかし昨年、担任の先生がそのトラウマを受け入れてくれたことで、私はトラウマと向き合う事が出来た。先生が私にトラウマと向き合う勇気をくれたからだ。同じ様に、千暁の絵も母の心にトラウマと向き合う勇気を与えた。トラウマの克服は難しいことであるが、トラウマと向き合うことで、母の心の傷も少しずつ癒えて行

くに違いない。千暁の絵は母の心に「正解」よりも強く、そして優しく響いたのだろう。私も「正解」よりも大切な物が、その優しさがわかった気がする。

私は人に頼ってばかりで、一人では何も出来ない。だから心の色も真っ白だ。そう気付いた時からずっと変わりたいと思っていた。自分一人の力だけで、自分の心の色を見つけ、変わらなくてはならないと思っていた。それは違った。鈴音も、千暁も、千暁の母も、人と関わり合って変わった。人と人の心の色が混ざり合って、自分の色になって行く。私ももう、真っ白ではなかった。親友から貰った優しい色、千暁に教えて貰った鮮やかな色、先生に貰った勇気の暖かい色、そして後悔やトラウマの暗い色。それらが混ざり合って、私の色になる。きっと誰も、一人では変わらない。人と関わって、心の色が混ざり合って、変わって行く。これからは、私がそうして貰った様に、私も誰かの心に色を与え、変わるきっかけを作れる人になって行きたい。

(「スクラッチ」歌代朔／あかね書房)